



もうひとつの京都の物語

京都者宣言

looking at Kyoto people with another eyes.

第2回 高見重光 T A K A M I 代表取締役

取材・文／袖岡保之 撮影／木村有希

京都発……。さまざまな分野で耳にするそのキャッチワード。伝統産業と呼ばれるものからハイテク企業まで、皆が冠にする。しかしそれは京都の押し売りでしかなかったり、街の現在進行形としてのリアルな話とは全く関係なかったりする。だからこそ「遊ぼう」と語りかけるこの人間の真正直さに、誰もが感嘆し、遊ぶことの重さを感じるのである。サービス、ホスピタリティ、はたまたラグジュアリーではなく、「もてなし」「しつらい」「ふるまい」であることの粋を、「にっぽんと遊ぼう」と、この人自身が楽しんでいる。楽しんでいられるからこそ、の文化の継承と発展がある。それが京都であり、TAKAMIという会社であり、高見重光という人間の凄みなのではないだろうか。

婚礼にせよ、宴席にせよ、衣裳は人を表すという大きな意味を持っています。昭和29年から「婚礼衣裳を貸しましょう」と貸衣裳業を始められた。その発想はドラスティックに、時代がデモクラティックになっていく気分をとらえた。まさにその先見はベンチャーであったと思うんです。そして今、高見さんが社長になられてからのTAKAMIもまた、衣裳を売るのはなくウエディング・ブライダルという人生最大のセレモニーをトータルに演出する企業へと転換、発展している。それは伝統や歴史といった傘の下でじっとしているのではなく、常に今の時代の「楽しみ」や「気分」を共有しながら動いていると感ずるのです。

高見 「そういうところからきたか！ 会社は来年で創業85年を迎えます。基本的に僕は『企業は永遠』というのは絶対条件だと思っている。永遠にやり続ける、やり続けたい……という希望がなければアカンと思う。社長であれ社員であれ、世の中からもそう思われたいけない。だからこそ維持ではなくて、企業として攻めることをやめない。TAKAMIと僕、ということという、今から25年くらい前にいた秘書が『コーポレートアイデンティティを確立させましょう』と言いました。その時『TAKAMIのベースとなるものは何や？』と

問うたら、『まずは社長自身がパーソナルアイデンティティをつくるべきだ』と返ってきた。僕自身が『押しも押されぬような自分をつくらなアカンのと違いますか？』と。そこからやね、攻めのTAKAMIというのか、今の、いや先の時代への流れを作り出すことが本当にできるようになったのは。既に60年の歴史と、呉服から貸衣裳という商売が世間で当たり前になっていた頃やっだし、儲かってないわけでもなかった。でも、何が欠けていた。自分を見つけて、会社を見つけて気がついたのは、時代の・街場の・現場のリアルな空気が読めていない、場が読みきれていない自分だった。場を読むというのは、『この人がお茶を飲む時ティースプーンはどんなスプーンを使いたがっているんだろう？』という細かなことまで読むということ。『靴はどんな履きたいんやろう？ 靴下は？ 靴下履く時、イスはどんなイスに座るんだろうか？』ということまで見えてなかったらダメ、というのが僕の言いたいこと。それは何だといえ自分が一番心地よい状態だということ。どうでもよければお客さんに勧められない。着物でありウエディングドレスでありタキシードであり……、全て同じこと。何のために着るの？ 何のために結婚式にお客様をお招きするの……？ というこ

- 第1回 1994年 小倉山二尊院
茂山千作・茂山千丞 天鼓流狂言山歌、片山嵐屋（狂言）
- 第2回 1995年 法然院
野村万丞（和泉流狂言野村万蔵巻、太鼓一座）竹太鼓
- 第3回 1996年 高台寺
日笠聖美（ソラン）、藤吉生（横笛）
- 第4回 1997年 総本山 永観堂禅林寺
片岡孝夫、片岡孝太郎（巻）、藤吉生（横笛）、中川秀亮（繪太鼓）、デヴァット（パンフルート）
- 第5回 1998年 大本山 大覚寺
スラヴァ・カワタケナシ、ラスタ・トマス、毛ダンダンス、古澤博幸（地歌舞）
- 第6回 1999年 平安神宮
ロン・コルシア（ヴァイオリン）、三好亮山（尺八）、藤吉生（巻）、ホセ・アントニオ（太鼓）、ホセ・デ・ラ・マル（ファンゴ）、京都少年合唱団
- 第7回 2000年 元祿宮二条城
大倉正助（鼓）、山口小俊子（パフォーミング・アート）、ウー（巻）、山中義徳（能楽シテ方ほか）
- 第8回 2001年 浄土宗総本山 知恩院
サイモン・ホン（Orchestra）、ウー（カバ）、ニック・ウッド（シンセサイザー）、寺井尚子（ジャズヴァイオリン）、炎太鼓（和太鼓グループ）
- 第9回 2002年 祇園新地甲部歌舞練場
呉汝俊（翁胡奏者）、京都舞妓、茂山七三、茂山宗茂、茂山逸平（天鼓流狂言）、茂山巻、舞妓連中（翁舞）
- 第10回 2003年 橋本園書記念館「白沙村荘庭園」
京都芸術劇場「春秋座」
井上幾子（キタ）、白濱優子（ヴァイオリン）、歌舞劇（OZ）市川白浪、市川宗兵、市川操、市川崑、市川右太衛門、二十世紀歌舞組、池田美紀（和太鼓）、TAKACHALOUÉ CHOR（キタ）

とがなかったら、全く僕の商売も僕も、発
展性もなければ楽しくも何もない」

マーケティングで動いているのではなく、
人という視点でプライダルをとらえられて
いる。

高見 「やっぱり商いの原点は1対1。
1×1、それが無限大であるという論理が
成立しなければ僕はダメだと思う。たとえ
ば『婚礼組数が減少してきた、さて婚礼業
界はどうなんですかね?』とか『1年間に
何組こなししているか?』という物の見方。
これだと人ではなく、物に対してなのかの
ような、そういうレベルでしかみられてな
い。でもうちは、結婚される1組のお客様
をプロデュースしているのであって、何組
の結婚式をやっているか?なんて考えてや
っていない。そこで重要なのが、僕が考え
ている事と同じか、それ以上の事をスタッ
フ一人ひとりが理解しているか?というこ
と。創業者であるうちのおじいさんがよく
言っていた言葉の一つに『樹人』というの
がある。樹の人と書いて『じゅじん』。木
を育てたり商品作りをしたりするのは簡単
かもしれないが、人を育てるのは大変なん
やと。『自分の思うようになってもらお
うというふうに持っていく』のがどれだけ
大事か、ということをおじいさんがしょ
っちゅう言っていた。『自分と同じように
考え、行動できる人間が3人いたり5人い
たりしたら、会社はめちゃくちゃ成長する
だろう。それぐらいの事ができたら企業は
すごく大きくなる』と語っていた。その時
は何を言っているのかわからなかったけれ
ど、僕が今大切に考えているのは、まずは
人を育てること。そして次にお金。お金を
ちゃんと回せるようにすること。結
局自分のところで流行をクリエイトできる
力をもたなかったら、そういった人間が集
まらなかったら、全然仕事としては成り立
たない。そのために人を育てる。それはま
た、自分を楽しませるとうことに繋がって
いく。僕自身が、自分の家族、社員、スタ
ッフ、友人という、自分に一番近い人を幸
せにし、楽しませることができないと、お

客様を幸せにできない。その積み重ね、そ
して連鎖、循環がうまくいっているから、
ありがたいことに、TAKAMIで結婚す
る方が増えている」

そんな高見さんが、呼びかける「にっぽん
と遊ぼう」。すでに14回が終わりました。

高見 「ある程度、来年の演出も決まっ
ています。企業と同じでね、これは僕は続け
ていこうと思う。やめなアカン理由はどこ
にもないし、続けていかないと。これこそ
やらされているのではなく自由勝手にして
いる(笑)。もちろん、自分にプレッシャ
ーをかけることも大切だし、だからこそ続
けていこうと思う。もちろん、京都から発
信するものの奥深さを知ってもらう為
は、つくっている我々が奥深くなかったら
だめなわけで。『しつらい』『もてなし』
『ふるまい』...、自分の為に一生懸命やっ
てくれる人達に対する最低限の礼を自分が
できているか?この当たり前の事が京都か
ら発信できなかったらアカン。だからこそ
『遊ぼう』と呼びかける。今ではやらずに
はいられませんがという気持ち、じっとして
いられない(笑)。また、続けるというこ
とにおいて僕は、先達が京都で我々に残し
てくれたものに対して、何を伝えていかな
ければいけないか、何をしたいかなければ
いけないか、そして何を残していかなけれ
ばならないかを考えていくという使命感が
ある」

そんな「にっぽんと遊ぼう」。場所の面白さ、
素晴らしさ、楽しむ姿勢やゲストの顔:以
上にTAKAMIのスタッフの方々の笑顔
や向き合っている気持ちが伝わる催しとい
うか、宴だなあ...と、毎回思います。

高見 「来ていただいた方が、一言『高見
さんありがとう』と、これが自分だけでな
くスタッフが受けたら『やってよかった』
と言うだろう。しかし、『やらされてる』
と思ったり、『社長の道楽違うか』と言っ
てるようではどこまでいってもアカン。で
もこの『にっぽんと遊ぼう』は、TAKAMIが、
ではなく本当は京都のあらゆる人

が立ち上がってやるべきイベントなんじゃ
ないかな。その為に自分はこれが出るよ
か、たとえばお金を出すことが出来るとか、
情報を出すことが出来るとか、私はこれを
つくる事が出来るよとか、私はこれを持っ
てくる事が出来る。力仕事が出るよ、そ
れぞれの人間が出来ることをパッと出来る
ようなことも考えていかないとアカンやろ
うなと思う。そしてこれからは次の時代を
予見する若い世代がもっと自由に参加出来
るようにしないと、と思っている。『ええ
物食べたら美味しかった』ではなく、どう
美味しかったのか、を伝えていく。そして
感動したものを素直に伝えられる人にも来
てもらおうように来年は、ちょっと頭をひね
っています」

高見重光 (たかみ しげみつ)

'51年、京都生まれ。同志社大学法学部卒、京都の特選帯地卸に3年間勤務。
京都の伝統文化や和装の知識を深く学ぶ。'79年、婚礼衣裳のレンタルサー
ビス業務を行っていた高見株式会社へ入社。専務取締役企画部長を経て、
'84年より代表取締役社長。全国へのショップ展開や、70周年、80周年を機
に新たな事業を積極的に展開し現在に至る。京都の文化継承を目的としたイ
ベント「にっぽんと遊ぼう」の呼びかけ人として、京都の由緒ある寺院で毎年
開催している。BIA(社団法人日本プライダル事業振興協会)常任理事。京
都商工会議所の一号議員でもある。「北山に土地があれば」とにかくツパ
ける」と(笑)というぐらい、北山通にはTAKAMI縁の施設が並んでいるが、
商業的な意味だけでなく、北山の景観を考えてのことでもある。「京都ノーザ
ンチャーチ北山教会」は竣工以来、北山のランドマーク(写真①)。高見重
光、若かりし頃の一葉。現役のロッカーでもある(写真②)。去る10月に行
われた07「にっぽんと遊ぼう」での二胡奏者・チェン・ミンのステージ(写真
③)。「北山 ル・アンジェ教会」には「レストラン VITRA」が隣接(写真④)
和装も同社のアイデンティティと言える。BE BRIDAL TAKAMI「吉祥の音色」
白 香穂吉祥花尽くし(写真⑤)。BE BRIDAL TAKAMIオリジナルドレスコレ
クション「Noble Classy」(写真⑥)



第11回 2004年 青蓮院門跡

ザンノルテ (歌・演奏、武田双葉(音通)、
TAKADAIQUE Choir (トキベル)、
藤田啓生(歌)、藤田生(指揮)、
八木(シンサイザ)

第12回 2005年 大本山相国寺

三好美樹 (尺八)、高安マリチ(指揮)、
松田美穂(歌)

第13回 2006年 真言宗総本山

徳岡隆甫(華道)、東寺(勸王護国寺)
菅野啓生(華道)、生流(次期家元)

第14回 2007年 黄檗宗大本山 高福寺

中谷雄風(煎茶)、飯茶風流(家元)
紫丸(指揮)、他4名
チン・ミン(二胡)、梵天 和太鼓
ニベルクワイヤ(ニベル)



THE TRINITY HOUSE

(ザ・トリニティ・ハウス)

教会ウエディングだけでなく、居心地のいい上質のパー
ティを叶えるスペース。地元の有機野菜をふんだん
に使ったフレンチとともに、豊富なワインが楽しめる
のも魅力であり、「最上級のもてなしの『心』と『カタチ』
を追求した」という、まさに時代が求めるパー
ティを可能にするTAKAMI最新の一軒。

京都市左京区松ヶ崎六ノ坪町5-7
☎075-723-0771 (京都ノーザンチャーチ北山教会)
<http://www.northern-church.gr.jp>